SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

アジアおよび静岡の茶と茶文化に関する学問横断的研究

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-04-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 戸部, 健 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00009378

アジアおよび静岡の茶と茶文化に関する学問横断的研究

戸　部　　健

筆者は、2014年度より、静岡大学の有志である今村直樹（日本近世・近代史）と長沼さやか（東アジア地域研究）らとともに、アジアおよび静岡の茶・茶文化を学際的に研究している。今年度もそのさらなる深化を目標に活動に取り組んだ。なお、今年度より英国の文学・文化を専攻する鈴木実佳がメンバーに加わった。また、昨年度の活動を基礎に科研費（基盤C）を獲得したが、その過程で大阪経済大学の吉田建一郎（アジア経済史）と静岡県地域史研究会の岡村龍男（日本近代史）も新たにメンバーに加わった。６月に第一回会合を開き、その場で以上のメンバーを基にして「東アジア茶文化研究会」を設立した。会員各位の今年度における活動内容は以下のとおりである。

今村は、近世日本の茶生産の実態を明らかにするため、天保13年（1842）熊本藩の農業生産力調査書（「諸御郡惣産物調帳」、個人蔵）の分析に取り組み、当時の茶生産が農業生産総額に占める割合は、１％未満であることを明らかにした。熊本藩では幕末の開港以降、茶生産が重視されており、それに伴い生産力が向上したと考えられる。

岡村は、①近世の静岡市域における茶の生産・流通・消費の一体的な検討、②明治期の清水港の貿易港指定以前における茶流通網と港湾整備、③狭山茶の生産・流通と埼玉県による静岡茶の調査、の研究を進めた。来年度は、まず①について論文として発表する予定である。

戸部は、近代における茶を通した日中交流史を検討する上で必要な史料の収集・分析に努めた。12月にはワシントンDCの米国議会図書館を訪問し、かつて旧満鉄東亜経済調査局に所蔵されていた中国茶業関係史料（『支那の茶業』(1920年代）など）を閲覧した。

吉田は、雑誌『茶業界』の記事や、『支那茶業の経済的考察』(1940年)、『支那茶の世界的地位と其の将来』(1942年）などを読み進めながら、近代日本の対ロシア茶輸出と中国の茶業との関係について検討を進めた。

長沼は、20世紀初頭から現代にかけて広東省珠江デルタの各県・市で発行された地方志などの文献資料を収集し、茶文化やそれにまつわる伝説の地域差や、時代ごとの変遷について分析を進めた。今後はこの成果をもとに広東漢族のエスニックシンボルとしての茶文化について、フィールド資料を組み合わせながら考察する予定である。

鈴木は、第14回東アジア科学史国際学会（ICHSEA）(2015年７月パリ）にて、諸岡存（1879－1946）の医学博士と文筆家としての活動に関する研究の口頭発表を行った。彼の二つのキャリアをつないだのは漢文の素養と科学的知識であり、茶への情熱だった。茶の分野は、「医学博士」の資格と知識を、一般読者を対象とする書物に向ける場だった。